御田植神事

H３１，２，６

１　御田植神事の由来

いつ頃から行われているかわからないが、現存する最古の棟札に「延宝二甲寅年宮方七人」{延宝年間(1673 ～ 1681)} と銘記されている。

この神事は宮方（７戸）の長男のみが世襲で伝えられ、他の家人には絶対に教えず、また当日は午後より境内女人立入禁止とされていた（平成３０年より女人禁制無くす）。

昔は正月６日の夜祭祀の初式とされていたが、終戦直後から２月６日午後３時頃より行われている。神事は苗取式、朝飯式、田打式、昼飯式、おおあし式、田植式、夕飯式の７つの儀式に分れて執行され、オハシ式は古宮家の世襲で、また宮方筆頭と称して宮方の長を受け継いでいる。他の６人の席順も定められている。

２　御田植神事式

まず、神前に麻の裃（かみしも）をつけた宮方（みやかた）７人、氏子総代一同着座、拝殿には小苗打（鳥追いをする子どもで以前の書物には７～１５才くらいの男子と書いてあるが、現在は小学生の場合が多い）、太鼓を打つ者が整列する。

まず、始めの太鼓の後、神官が祓、開扉、献饌、田植神事式の祝詞奏上をする。

(1)　苗取の式

祭壇に供えてある苗の藁（**のうてわら**）１把を神官が、おおあし式をする宮方を除いた６人の「しろうと（代人）」に上座より渡す。

受け取った「しろうと」は、その藁の「ぬいご」を３本抜いて紙に折って懐中に入れる。次々に渡し、終わると神官がその藁束を神饌屋におさめる。

次に、祭壇に供えてある三尺余りの松６本を神官が、６人の「しろうと」に一本づつ渡す。この松の葉（稲苗になぞらえたもの）をとりながら宮方は誰にも聞えないように神歌を唱える。一把づつ束ねるごとに、太鼓の合図で、小苗打が、厚板を捧（昔は椿の枝とされていた）で打ち鳴らして囃す。

(2)　朝飯の式

祭壇に供えてある曲物（まげもの）を神官がおろし、７人の宮方へこの中から一升餅を５つに切ったものを授与する。宮方はいただき納める。

(3)　田打の式

祭壇に供えてある桑の木でこしらえた白木の鍬６挺を神官が「しろうと」に渡す。受け取った６人は、この鍬顔のところまで捧げて拝殿に下りて来て一列に並ぶ。神前に向って奇数の者が拝礼すると、つぎに偶数の者が拝礼すること３度、一度終るたびに太鼓を合図に小苗打が囃す。全部終えて元の席に着座し神官に鍬を渡す。

(4)　昼飯の式（朝飯の式と同じ）

(5)　「おおあし」の式

祭壇に供えてある三尺四寸の「おおあし」を神官が宮方最上座の「おおあし引き」に渡す。「おおあし引き」は拝殿へ進み、神前に向つて身体を屈（かが）み、前へ七足、後へ五足又前へ三足（七五三）で一回終わると、太鼓の合図で小苗打が囃す。３回繰り返して元の座に着座し神官に「おおあし」を渡す。

(6)　田植の式

６人の「しろうと」は、順次拝殿に進み神前に向って苗取式にとった苗松の葉を１把づつ懐中から取り出し、自分の前に撒く。これが田植となる。植えながら口の中で誰にも聞えないように神歌と唱える。一把植える毎に、太鼓を合図に小苗打が囃す。

(7)　夕飯の式（朝飯、昼飯の式と同じ）

玉串奉奠の後、神官が撤饌、閉扉を行う。その後終わりの太鼓で神事式は終了する。

次に、神前へ供えてあった小さい切餅やお菓子を氏子総代によって小苗打や一般参拝者に撒く。

昔の古老は、苗取式や田植式によってその年の豊作凶作を占ったと言うことである。宮方を中心に渡された餅は諸病に奇効があると言われ家々で大切にされている。